

喜田貞吉先生の人と学問

米倉 二郎

一、

昭和四年夏休明けのまだ蒸し暑い京大陳列館内の教室であつた。喜田講師の国史地理の集中講義に出席する。和服姿で腰に手拭をぶらさげ、信玄袋を抱えた田舎の村長さんのような風貌の先生が現われた。信玄袋からノートと煙草と灰皿をとり出され、椅子にかけて一服される。君達も疲れるだろうから煙草飲んでよろしい。たゞし三浦君などが廊下を通る時には控えるようにと仰しやる。三浦君とは三浦周行先生のこと、国史の先任教授で厳格を以て聞えていた。生来の野人であられた喜田先生は性格的に三浦先生とはそりが合わないなかつたようだ。

喜田先生は口も八丁手も八丁のエネルギッシュな方で、自由奔放に思った通りの事を歯に衣を着せず云つたり書いたりされた。考古学の浜田耕作先生が醸生式土器についての講義の折、自分がイギリス留学から帰つて新説を発表したところ喜田先生から「浜田は洋行して馬鹿になつた」と叱られたと苦笑しながら話されたことがある。喜田先生の講義は談論風発で大変面白かつたが、さて何を聞いたか今は思い出せない。あまりにも多くのことを短時間に承わつた為であらう。

喜田先生は講義中百万遍のとある宿坊に滞在されていた。たまたま

北海道の白老？のアイヌの人々が酋長以下総勢二〇人位民族舞踊のショウのため大阪まで来たが、大阪の興業主がおもわくがはずれて放り出した為路頭に迷ふこととなり喜田先生に泣きついた。先生は彼等を独で自分の宿坊に収容された。一日受講生一同そのショウを見せてもらつた。酋長が喜田先生の親切を涙を流して語つたことは未だに忘れられない。

喜田貞吉先生が逝かれてから、はや四十年が過ぎた。喜田先生が今日の日本歴史地理学の開祖の一人であられることは、みな人の良く知るところであるが、直接先生の講筵に列し得た者も次第に減つて行くので、その幸運に浴した者の一人として、ありし日の先生の思い出を記しておくことも無意義ではないかと考え、本号監修者の要請に答えることとした。

喜田先生は明治四年一月の誕生で昭和六年還暦に達せられた。翌七年京大での受講生が中心になつてその祝賀会が催された。それに感激された先生は「還暦記念六十年之回顧」と題する二七四頁にわたる自叙伝を昭和八年にまとめられ、門下有志者にくださった。先生は生涯日記をおつけになつていたようで、先生の足跡は本書に詳述されておる。また日本歴史地理学会は機関誌歴史地理の七十四巻二号（昭和十四年八月号）を喜田博士追悼号として特輯し、諸家の追悼を集録、それは二号だけで足らず三号に及んでいる。以下主として右の文献に基き先生の学界における足跡一般を紹介しよう。

二、

先生は徳島県小松島市の南部の檜洲の農家に生を受けられた。徳

島中学、三高（現在京大教養部）を経て東大で国史科に学び明治二十九年卒業、引き続き大学院に席を置かれた。研究題目は「日本の歴史地理」であった。大学院の研究テーマに歴史地理を選ばれたのはおそらく先生を以て嚆矢とするであろう。

明治三十二年四月、先生は当時学生として先生宅によく集まって来られた堀田潭左石、藤田明、小林庄次郎氏を始め、大学院の同窓先輩など合せて十人を発起人とし、構成員には東大国家史家の先生方さらに吉田東伍、小藤文次郎など、学界の知名士を加え日本歴史地理研究会（後に日本歴史地理学会と改名）を組織された。そしてその十月、月刊の機関誌「歴史地理」を発刊された。巻頭の学会設立趣意書によれば、

古今東西各歴史あり、中畧歴史は決して空中の樓閣にあらず、土地ありて初めて社会あり、国家あり、社会と国家とありて初めて歴史あり、歴史と地理と離る可からざるの理実ここに存す。

中畧「吾人は此間に動かすべからざる一大理法の存するを信ぜんとす、然れども、しやけんの研究に対しては中畧「わが歴史地理研究会の主として当らんとする所にあらず、中畧」

地理は最も価値ある史料の一つとして、史的事実研究上尠少なからざる光明を与うるを見るべし、これを以て史家は到底地理を閑却する能わざるなり、中畧」

邦国において、その古代地理の研究より始めずんば、各時代歴史の真相は到底うかがう能わざるなり、日本歴史地理研究会の起る可からざる所以実ここにあり。中畧」

すなわち、他人の理法の研究は人文地理学に委ね、歴史地理の研

究は歴史の解明に資する一つの有力な史料として各時代の地理を究め、その変遷を明かにするにあるとした。この趣意書はおそらく先生が起草されたもので歴史地理を、史家の有力たる史料の一つとして研究するという、歴史の補助学としての歴史地理学を宣言した。

喜田歴史地理学の特徴とまたその限界もここに明らかである。

明治三十四年先生は文部省の図書審査官に任ぜられ、教科書の検定からやがて国定教科書の編纂に従われることとなった。

明治三十八年いわゆる法隆寺の再建非再建の論争に立ちあがられた。日本書紀に法隆寺は天智天皇九年（六七〇）一層余すなく焼失たと見え、現在の寺院は和銅頃の再建とするのが当時の通説で小杉温禰先生の説かれるところであった。小杉先生は喜田先生御甲の大先輩で歴史地理研究会の顧問でもあられた。これに対し建築史家の関野貞先生が法隆寺の様式論から「法隆寺堂塔非再建論」を史学雑誌に発表され、史学雑誌の記者浜田耕作先生がこれに譴意を表明された。これに対し喜田先生は先輩小杉先生を弁護すべく駁論を史学雑誌にさらに歴史地理に相次いで発表十一篇に及ばれた。関野、平子氏また受けて立ち、それぞれ三篇、学界の壯観であった。

この法隆寺論争は大正十五年五重塔下に空洞が発見され、心礎はその下三米にあり、その中に銅蓋で覆われた孔があつて舍利壺が納められていたことが判つたことで再燃した。さらに昭和十四年法隆寺西院伽藍の東南にあつたとされてきた若草伽藍の発掘が行われ、これが天智九年に焼失した法隆寺ということの様式論者も認めることとなり、現法隆寺がその後再建されたものとする喜田博士説が有利となった。（近鉄編 総観法隆寺 昭和二四年）

法隆寺論争に続いて平城京址についても関野、喜田両先生間に論争が勃発した。喜田先生は歴史地理専攻の立場から平城京址についてはかねて調査を行っていたが関野先生は奈良県技師として多年にわたる調査研究を明治三十九年建築学会ならびに建築雑誌に発表された。喜田先生これに対し個人的に所見を述べられたようであるが、関野先生が「平城京及大内裏考」として所論をまとめられ学位論文として提出され東大工科大学（工学部）より工学博士の学位を受けられ、論文は紀要として公表されるに及んで、喜田先生の猛烈な批判が歴史地理誌上に相繼いで掲載されることゝなった。すなわち「平城京の四至を論ず」が八巻二号から十一号にかけて八回、「平城京及大内裏考評論」が十二巻二号から十三巻五号にかけて九回に及んだ。主たる争点は平城京研究の先駆者北浦定政の復原図に京北に北辺条が置かれていたのを、はじめ関野貞博士がそれに従われていたのを喜田先生が否定された。のち関野博士も北辺条を削られたが、それは大和盆地京南条里の研究からの訂正であった。この大和条里について関野博士が平城京計画前から施行されていたとされるのに対し、喜田先生はこれを後とされた。なお尺度について関野博士が九寸八分弱とされたのに対し喜田先生は文献から九寸七分五厘であらねばならぬとし、東極における条坊と条里の延長の比較からこれを証明されるとされた。

喜田先生はこの平城京に関する研究を主論文として学位の審査を工科大学に求めんとされたが主任の塚本教授は審査に適する者が居ないと体良く逃げられたので文科大学に提出されることになり、明治四十二年文学博士の学位を得られた。

先生はこの学位論文を文科大学紀要として公刊を要望されたが、それに至らず大学に保管されている間に大正十二年の震災で焼失したとのことである。なお先生の平城京をはじめ古代の諸京に関する研究の概要は大正四年「帝都」として出版されている。

平城京についての知見は関野、喜田両先生の論争によって大いに広められた。戦後奈良国立文化財研究所により平城宮発掘調査が行われているのも両先生検討の成果をふまえて、さらに発掘による精査を実施している理である。それによると既往の研究による一坊里一八〇丈の方眼による基礎プランの存在が確認され、大路が八丈であったことも判明したが小路は必しも四丈のみでなく、また大路の幅を規定以上に広げる場合には西側の坪から、これを削りとつたことが明らかとなった。（坪井清足・鈴木嘉吉埋もれた宮殿と寺 昭和四九年）なお尺度については○・九七尺から○・九七七尺まで場所によって小差があるようである。

喜田先生は当初専ら文献史料を駆使して法隆寺さらに平城京について関野博士等を論破せんと試みられた。しかし論争の過程で論敵の拠り所とする様式をも、例い否定する立場からにもせよ、自ら問題とせざるを得なくなれば、実地と実物の検証に努められるようになられた。かくて先生は歴史地理学から、さらに考古学、民族学、民俗学など文献史料以外の資料をも用いる隣接科学の研究に広く手を染められるようになったのである。

三

この間、喜田先生は本職の文部省役人として国定教科書の編纂に

当たられたが南北朝の取扱いについて、国定教科書のそれが国体の尊厳を犯すおそれありとし、一部教育者から、シャーナリストにとりあげられ、さらに議会の問題に発展した。かくて先生は明治四十四年文官分限令により休職処分につせられた。先に久米邦武先生が「神道は祭天の古俗なり」で世の右翼の攻撃によつて職を去られたのにつぐ筆端によるバージであった。この間のいきさつは先生の「六十年回顧」に詳述されている。

大正二年先生の休職は満期となられた。さて先生の東大での同期の内田銀蔵先生は、その頃京大史学科の創設に當つておられ明治四十一年から喜田先生を文部省在勤のまま講師に招聘されていたが、休職満期によつて専任講師に格上げされた。内田先生は教授のポストを画策されたようだが、講座の増設は当時も現在と同じく困難であつたようだ。

大正七年早稲田大学の吉田東伍博士が逝去された。喜田博士はその後任にと交渉を受けられたが辞退されたとのこと、この事を内田博士に話されたところ、自分が早大に行つて京大教授の地位を譲りたいと云い出されたという。友情に厚く名利にとらわれない内田先生の面目がしのばれる。この内田先生が大正八年急逝され、喜田先生はその後任に懇請された。先生は後進が育つまではと期限付きで、これを受けられた。大正十三年にまたもとの講師に帰り、同時に東北からの要請を受けられ、以後京大と東北大とをかけ持で講義をもたれることになつた。

当初、先生は京大で古代史を受けもたれ、従来の文献史学から古墳やその他の遺跡、遺物などの考古学に目を開かれ、さらに進んで

倭人の民族学的研究へと発展された。かくて個人雑誌「民族と歴史」を大正八年から発行された。さらに先生は同和問題の研究に早くも着目され、誌名を「社会史研究」と改められ通巻五十号に至られたが震災の影響で廃刊された。発表された論文雑誌は大小二百余篇に及ばれた。

昭和三年には新たに「東北文化研究」を発刊され、多くの考古学の資料を東北大学に集積された。今日立派な資料館に発展した。

かくの如くして先生の発表された論文、雑誌は昭和七年までに一三〇〇篇の多きにのぼつておる。たゞ単行本は前記青森の他に二冊を数えるに過ぎない。なお明治三十二、三年の頃は中世教科書として「日本地理」また講義録として「日本地理」「外国地理」を出されている。

先生は個人での研究旅行を好まれた。明治二五年以来の日記から旅行回数七百回、国内は北海道から沖縄県まで足跡至らざるなく海外も朝鮮、満洲に及んでおられた。

このように席の暖まる暇もなく研究旅行を行いながら多くの論稿を物された秘法を伺つたところ国史大系などの根本史料は二部購入され、一部はばらして必要部分だけ旅行に携帯され、旅先の宿舎でも論文を執筆されたことであつた。

先生は昭和十年直腸癌にかゝられたが、手術により奇蹟的に回復され、朝鮮に単独旅行されるほど元気になられた。しかし昭和十四年胃癌にかゝられ遂に手術中に逝去された。時に六十九才であられた。

(昭和五一―五二年度会長 Ⅱ 広島修道大学商学部教授・広島大学名誉教授)